



できごと

平成26年6月18日に子ども図書研究室は開室10周年を迎えました。これを記念して、22日(日)に子ども図書研究室開室10周年記念講演会を開催しました。講師は、日本図書館協会児童青少年委員会委員、前国際図書館連盟(IFLA) 児童・ヤングアダルト分科会常任委員の依田和子氏です。

同時に開催した展示会「絵本で知る世界の国々-IFLA からおくりもの-」では、IFLAの「絵本で世界を知ろうプロジェクト」により集められた世界各国の絵本を展示しました。このプロジェクトに深く関わられた講師に、プロジェクト誕生の経緯から世界の国々へ広がっていった様子まで、映像を交えてご紹介いただきました。(2ページ目にて、概要を紹介します。)

平成26年8月7日に韮山文化センターで平成26・27年度に渡って開催される静岡県子ども読書アドバイザー養成講座の第1回目がありました。本講座は、地域で子どもと本をつなぐ活動をしている方の中から、リーダーとして、学校や図書館をつなぐコーディネーターとして活躍していただく方を養成するための講座です。

その読書アドバイザー養成講座で、児童文学者・翻訳家の清水眞砂子氏が基調講演を行いました。清水氏は、昨年度の子ども図書研究室の講演会を振り返りつつ、今の社会や子どもたちを取り巻く状況について指摘し、大人がすべきこと、本を読んでいて楽しいと思う時についてお話しくださいました。

(3ページ目にて、概要を紹介します。)

◇子ども図書研究室のテーマ展示◇

◆「月の本」

2010年から2014年に出版された本の中から月が出てくる本を集めました。

◆「ユニバーサルデザイン絵本」

子ども図書研究室で所蔵しているユニバーサルデザイン絵本をご紹介します。

◇イベント情報◇

◆平成26年度第22回静岡県図書館大会

会場：静岡県コンベンションアーツセンター
グランシップ

日時：平成26年12月8日(月)

9:45~15:45

申込み：9月5日から受け付けます。

申込用紙(県立中央図書館ホームページからプリントアウト・県内公共図書館で配布)に記入の上、来館、郵送またはFAX

宛先：静岡県立中央図書館 企画振興課振興係
〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-1

FAX：054-264-4268

締切：平成26年11月6日(木)

※第3分科会は11月20日(木)まで

◆子どもの本に関する分科会

: 13:45~15:45

◇第2分科会 児童に対するサービス (定員180人)

テーマ：「小学生への読み聞かせ〜がんばれ！
児童図書館員&ボランティア〜」

発表者：杉山 きく子氏

(元都立多摩図書館員

・児童図書館研究会運営委員長)

◇第3分科会 子どもと読書 (定員450人)

テーマ：「武田美穂ワールドへようこそ！〜えほんは楽しい〜」

講師：武田 美穂氏(絵本作家)

◇第6分科会 学校図書館 (定員70人)

テーマ：「今、求められている学校図書館活用の在り方〜学校図書館に関わる人たちの効果的な連携を考える〜」

講師：渡辺 暢恵氏

(東京学芸大学非常勤講師)

子ども図書研究室 開室 10 周年記念講演会要旨

講師の依田和子氏は、世田谷、横浜で文庫活動をしなが、大学等で英米児童文学、図書館学を学んでこられました。1995 年に「よこはまライブラリーフレンド」、1998 年に「かながわこどもひろば」を発足。「かながわこどもひろば」では、神奈川県立地球市民かながわプラザ（あーすぷらざ）でおはなし会等を行っていましたが、2000 年から、「絵本で知る世界の国々～展示とブックトーク」を開始しました。世界の国々を紹介する目的で、その国出身の画家（作家）の絵本、その国を舞台にした絵本のほか、写真集、参考資料などを展示し、ブックトークも行います。

そのような経験から、国際図書館連盟(IFLA)の児童・ヤングアダルト分科会において、「絵本で世界を知ろうプロジェクト」を提案しました。世界各国の図書館員が推薦する絵本のリストを作成するプロジェクトです。

2012年のIFLAヘルシンキ大会で展示を行ないましたが、その時点で集まっていたのは147冊でした。その後も続々と各国から絵本が寄せられ、現在は36か国からの約300冊に達しました。大会後、2セット作成された巡回セットのうち、1セットはフランスへ、もう1セットは日本の国際子ども図書館へ寄贈されました。

作品の選択基準としては「1～11歳の子どもに適した作品」「人気があり、長く読み継がれている、または、今後読み継がれていくと思われる作品。また、名作と見なされていて、その国最良の絵本を代表する作品」「その国で出版された作品」「絶版になっておらず、入手可能な作品」などがあります。

その国の代表的な絵本 10 冊を図書館員が選ぶということでしたが、選定方法はそれぞれの国に任されており、アメリカでは図書館員によ

るアンケート、イギリスでは投票も行われました。一方で、だれがどのように選定するかについての調整がつかないために、未参加の国もあるようです。冊数も、10 冊ではなく、11 冊だったり、また、もっと少なかったりする国もあります。

日本では、日本図書館協会の児童青少年委員会が選定しました。『しっぽのはたらき』『かばくん』『だるまちゃんとてんぐちゃん』『11ぴきのねこ』『ぐりとぐら』『絵で読む広島原爆』『やまんばのにしき』『だいくとおにろく』『おつきさまこんばんは』『ぐるんぱのようちえん』の10冊です。日本における絵本出版が盛んになった1960年代の絵本が中心となりましたが、これはアメリカやイギリスも同様です。

韓国では、金大中氏が大統領になって以降、子どもの本と図書館作りに力を入れた政策を打ち出し、優れた絵本が出版され始めました。そのため、韓国の10冊は2000年以降のものが中心となっています。ほかにもアフリカや中南米の絵本も2000年代が中心です。絵本は、出版社、作家がいなければ成立しないからです。

外国の絵本は世界を知る強力なツールになると同時に、私たち大人にとって、字が分からない子どもたちは、こういう風に絵を読んで理解しているんだということが実感できるという講師の言葉が印象的でした。

所蔵資料から

研究

『子どもの本で知る世界の国々
アメリカ・中南米』



かながわこどもひろば／編
かながわこどもひろば
2013年7月

講師の所属するかながわこどもひろばが企画した展示のブックリスト。アフリカと中南米を知るために役立つ約1,000冊を収録している。

(鈴木由)

子ども読書アドバイザー養成講座 第1日目基調講演要旨

講師は、昨年、子ども図書研究室講演会でもお話くださった清水眞砂子氏。この日も、子どもと本をつなぐ活動のリーダーとして、学校や図書館をつなぐコーディネーターとして活動をするようになる受講者に厳しくも温かいお話をしてくれました。



昨年、県立中央図書館で、現代は「半音のない世界」で、多くの人が子どもの本をかわいくて、明るいものだと思っているという話をしました。1年前も、今も、日本人は何をやっているのかと思います。

不幸な事件であり、どのようにとらえていいのかはまだ分からないところもありますが、先日の同級生を殺めた佐世保の高校生は、人間の一面を知らせるために神が遣わしたのではないのでしょうか。どんな親でもどうしようもないことがあります。努力すれば災いを防ぐことができるというのは、傲慢な考え方だと思います。

このような事件が起こると、「早期発見、早期治療が大切だ」という主張がなされます。もっともなところもありますが、このような主張によって、相互監視が強まっていきます。

こうした事件が起きた学校の教員や、自殺をした子どものいる学校の教員が「子どもたちを早く平常心に戻したい」と言うことがよくあります。これは、大人が不安や悲しみは取り除くべきだと思っているから出てくる言葉です。でも、不安や悲しみは、簡単に取り除くことができるのでしょうか。衝撃的な出来事は、子どもも時間をかけて引きずるのが当然ではないのでしょうか。

また、大人は、一人でいる子どもを見つけると、かわいそうだと思い、集団の中に入れようとしみます。でも、一人でいることは、いけないことでしょうか。孤独にじっくり考える時間が人生には必要ではないのでしょうか。

大人のすべきことは、不安や悲しみ、孤独を取り除き、相互監視による縛りのきつい社会をつくることではありません。大人がすべきことは、絶版になった本の復刊リクエストハガキを出版社に送ったり、地域の本屋さんで本を買ったり、いい新聞記事があればその旨をハガキで新聞社に送ったりして、文化を育てることです。

養護施設にいい本をそろえるのも大人の役割です。血縁者がいなくても生きていけることを描いた本を子どもたちに提示することが必要です。マイナスをマイナスのまま放置するのは動物と同じで、マイナスをプラスにできるのが文化の力です。家族の欠けた人、共同体に属せない人をそのままにしていいいのでしょうか。

本を読んでいて、楽しいと思うのは、「べき論」や常識といった縛りから解放される時です。相互監視や常識によって、現代はがんじがらめになっています。文学には、常識や自分の思い込みから解放してくれる力があります。だから、子どもの周りによい本をそろえ、子どもに本を手渡す必要があります。本を読み、自由に楽しそうに生きている大人の姿を見せることが、子どもにとってもいいことではないのでしょうか。

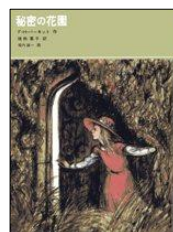


この他にも、答えのない問いを若いうちにたくさん抱えることが人生を豊かにするなど、世の中の軽薄さに対する清水氏の考えをたくさん伺うことができた講演会でした。

所蔵資料から

文学

『秘密の花園』



バーネット／作

猪熊 葉子／訳

福音館書店

2003年6月

講師が講演の中で、最近読み直した古典として紹介した本。この物語の主人公は、「普通」とはみなされない家庭環境で成長します。

福音館文庫や岩波少年文庫版もあります。

(青木)

文学

『あっぱれのはらうた』



くどう なおこ／詩・文
ほてはま たかし／絵
童話屋
2014年5月

本書は、『のはらうた』出版30周年を記念して、のはらむら24人についてのエッセイとこれまでの『のはらうた』シリーズの中から48編の詩を集めて出版された。付録として、のはらむらの住人125人の氏名と集合写真ならぬ集合きり絵が付いている。

収録されている詩は、いずれも前向きなものばかり。のはらむらの住人も個性的なので、親子で声に出して読んで、好きな詩や好きな住人を話し合うのも面白いだろう。【小学校低学年から】（青木）

文学

『クリオネのしっぽ』



長崎 夏海／著
佐藤 真紀子／絵
講談社
2014年4月

中学2年の美羽は、暴力事件を起こして以来、学校では一人で過ごしているが、唯ちゃんはただ一人の例外で、本のお話をしながら一緒に昼休みを過ごし、下校する。事件を起こし、近くの中学校から転校してきたサッチとの関わりの中で、3人は友だちの意味と距離をとらえ直す。

3人それぞれに複雑な家庭環境の中であって、家族を思いやる気持ちも描かれている。暴力の連鎖から抜け出すために取った解決方法がやはり暴力であった点は気にかかるが、読後感はさわやかである。【小学校高学年から】（鈴木由）

絵本

『でんしゃがまいます』



秋山 とも子／さく
福音館書店
2014年4月

この絵本は東京・新宿駅のある1日を、早朝から深夜にわたって詳細に描いている。どのページにも、それぞれの目的を持って駅を訪れた人たちと駅中で働く人たちの姿が満載である。普段なかなか目にすることができない朝6時のホームや、舞台裏である事務室や休憩室の様子も知ることができる。出版から20年以上経ているため、少し古びた感じはするが、読み終わると1日駅にいた気分になる楽しい絵本である。

月刊「こどものとも」700号記念コレクションの1冊である。【小学校低学年から】（小松）

絵本

『なんでもあらう』



鎌田 歩／作
福音館書店
2014年5月

けんちゃんは、泥で汚れたスニーカーをはいて、汚い自転車に乗って家を出た。しばらく行くと、モップとバケツを持ったおじさんに、「きたくないままだとあぶないぞ。」と言われ、自転車をきれいに洗ってもらう。その後おじさんに連れられ、安全のために洗浄している公共交通の現場を見学する。道路清掃、電車洗浄、空港での飛行機の洗浄作業の様子が、分かりやすく描かれ、子どもの安全に対する認識も深まる絵本である。最後に、けんちゃんとおじさんは銭湯に入りさっぱりする。【4、5歳から】（小松）